



## 大震災から10年・交流の記憶②

震災を経験したからこそ、  
痛みがわかる 市町村を越え、  
助け合っていききたい

2011年、ペーカリーハウスアルジャーノンが10周年を迎える年に震災が発生し、いわき市に避難。翌年6月に平上荒川の仮設住宅脇に仮設店舗を開いた。

檜葉町商工会のアドバイスで移動販売も始めたが客は避難者を中心だった。震災から5年後、知人の紹介で住んでいた小名浜に店舗を構えた。徐々に地元客が来店するようになり、顔なじみも増え、「頑張って」と声をかけられることが増えた。

檜葉に戻れる日が来るとは思っていなかったが「笑ふるタウンならには出店しないか」と声がかかり2018年檜葉町にも開店。不安はあったが、いざ店を始めるの懐かしい顔に安堵し、いわきからの客も来てくれた。

いわきと檜葉の  
架け橋になるために

「小名浜にもあるね」と言われることもある。両方に店を構えたことが新しい繋がりを生んだ。「いわきと檜葉の架け橋になれば」とイベントにも出店し、多様な世代が交流する機会を増やしたいと思う。八橋さんは、店を開ける日は早朝2時に起き、両店のパンを焼く。小名浜で焼いたパンを自ら檜葉に運び、次は檜葉でパンを焼く小名浜に運ぶ。心身ともに辛く感じる時もあるが、新しいパンをどんどん作り、こちらの店も地域の人に愛され続けるようつっていくと決めている。

震災を経験したからこそ、令和元年東日本台風のいわき地域の被害には強く心を痛めた。水害の状況を見て震災当時の情景を思い出し、自分たちが「避難した時の思い、その時と同じ思いをしてほしくなかった」と矢内さん入言。断水のため、いわき市から檜葉まで入浴しに来る人を見た。今後何があるかわからない時代、市町村を越えお互いを助け合っていきたいと願っている。



ペーカリーハウスアルジャーノン 小名浜店

左 八橋 真樹さん

右 矢内 久美子さん

檜葉町出身の姉弟。2000年に檜葉町に(ペーカリーハウスアルジャーノン)をオープンしたが、震災により閉店を余儀なくされる。2011年にいわき市に避難。現在はいわきと檜葉に店舗を構え、2人で協力しながら地域で愛されるパン屋を目指している。

今回は2021年1月25日(月)掲載予定です。